

36. 《地下の多摩川の上に、玉川上水?!・・・新説》

日本一長い川は、岡山県の旭川。それは、海面が低下していた大昔のこと。旭川は、瀬戸内を流れ下ってから太平洋に注いでいましたから、当時日本一だったと推定されています。そんな大昔、東京湾に注ぐ多摩川も隅田川も、東京湾口を河口とする河川でした。(現在の長さNO1は、信濃川です。)

さて、東京西部の地下を流れる雨の軌跡を見てみると、多摩川と隅田川の間に、地下を流れる別の多摩川が存在することが分かります。そのルートは玉川上水に近似。神田川の水源である井の頭も、このルート上にあります。

玉川上水は、武蔵野台地の一番高いところを開削したもので、そのルートは直線状。そのルートに地下河川が存在。これは、何を意味するのでしょうか。

大昔、多摩川は、玉川上水ルートに、自然堤防を築きながら流れる天井川だったと推察します。その後、富士山の爆発物によりその流路が塞がれ、火山灰が降り積もって自然堤防が武蔵台地の中で微高地となり、そこに玉川上水が開削されたということでしょう。

この新説、皆様はどう思いますか。この説に従えば、玉川上水の機能を完全復活して水を流すことは、多摩川旧河道上に維持流量を流すということになるのですが、・。ちょっと思考が飛躍しすぎかな？

なお、現在、多摩川下流域で氾濫原を共有する鶴見川は、独立の地下河川が存在することが分かります。

写真は、地上へ降り注いだ雨が流出し、また地下浸透する3次元流動経路を平面的に投影表示した図（(株)地圏環境テクノロジーのHPより）と、y a h o o水系図をレイヤーしたもの。

